私設図書室 ゆるくつながる

お年寄りや子ども、外国人も

本を読んでも 読まなくても

ふらっと立ち寄り、本を読んでも読まなくてもいい――。そんな私設の図書室が、団地や住宅街に開設されている。近所付き合いや世代間の交流が薄れつつある中、身近な場所で本を手に取ることを通じ、ほっと一息できる、ゆるやかなつながりを生み出そうとしている。（浅野榛菜）

▲団地などに住む人たちの交流の場になっている図書室「トライぶらり千島」（19日、大阪市大正区で）＝東直哉撮影▼ベトナム語など多言語の本が並ぶ「いくPAの図書室～ふくろうの森～」（21日、大阪市生野区で）

70年代団地で

大阪市大正区の「千島団地」に設けられた図書室「トライぶらり千島」で19日、手芸のワークショップが開かれた。小説や大阪の歴史本など約1000冊が並ぶ中、参加者は雑談しながら小物を作った。そばでは、絵本を開いて読む子どもの姿もみられた。

2年前に引っ越してきた籠原福枝さん(76)は「夫も亡くなり、なかなか知り合いもできなかった。『体力が落ちちゃって……』と、同年代でおしゃべりできて楽しい」と話した。

1970年代に建てられた千島団地（計2536戸）を含め、都市再生機構（UR）が管理する賃貸住宅では、高齢化や単身世帯が増加しており、URの調査では、65歳以上の高齢人口が36・9％を占める。こうした状況を踏まえ、住民が立ち寄れる居場所を作ろうと、民間の事業者が昨年12月に図書室を開設した。

本棚には約20人の「オーナー」がいて、それぞれ使用料を払って好みの本を並べている。オーナーは店番もでき、その一人で団地住民の山本久美子さん(74)は「孫は遠くに住んでおり、ここなら、地域の子どもたちと話ができる。『本でも読みにいこうかな』と、気軽に遊びに来てほしい」と話す。

27言語1000冊

思い思いの場所に本棚を設置し、本の貸し借りを通じて出会いを生み出そうという取り組みもある。

2011年に大阪で始まった「まちライブラリー」は4月1日現在、登録件数が累計で全国1290か所。運営者の約8割が個人や店舗などの小規模団体だ。

その一つ、大阪市生野区にある「いくPAの図書室～ふくろうの森～」は22年9月、廃校となった小学校を活用した複合施設にオープンした。4人に1人が外国籍という地域性から、韓国やベトナムなど27言語の1000冊以上がそろう。

ベトナム人のボランティアによる読み聞かせや、ベトナム人の母親向けの日本語教室も行われている。運営するNPO法人「IKUNO・多文化ふらっと」の森本宮仁子代表理事(66)は「母国語の本があれば、安心感を感じてもらえるのでは。慣れない環境で不安を感じている人が一息つける場所でありたい」と話す。

再開発を手がける森ビル（東京）で長く文化、教育事業に携わり、一般社団法人「まちライブラリー」代表理事を務める礒井純充さんは、「生活者の目線で『こういう場所があったらいいな』という思いを、本をきっかけに実現できるのではないか」と話す。

悩み相談

本を入り口に、心身の悩みや孤独感を気軽に話せる図書室もある。

大阪市阿倍野区の公園に面した「みんなの図書室ほんむすび」は、理学療法士で、1級建築士の起田陽子さん(43)が4年前に開設した。病院で勤務した経験から、「病院と日々の暮らしを結ぶ場を作りたい」との思いを込め、自身の事務所に併設した。

室内には、本棚を借りた約50人のオーナーがおすすめの本を並べている。看護師や介護福祉士、保健師などの資格を持ったスタッフらが店番に入る時もあり、お茶を飲んだり世間話をしたりする中で、子育てや介護、体調の悩みを話すこともできる。

起田さんは「『本を読みに来ました』という気持ちで気楽に入ってほしい。心地よい距離でつながってもらえたら」と語った。

自宅前に近所の人向けの本棚を設置している東海大の沢岡詩野教授（都市社会学）は「私設図書室は、本を介したゆるやかなつながりの中で、過ごし方を選べる場になっている。身近な場で顔の見える関係が築ければ、困った時に頼れるセーフティーネットとなり、街づくりの起点にもなる」と指摘する。